

# 水温情報

## 第3号

沖縄県水産試験場 2001年7月発行

901-0305 沖縄県糸満市西崎1丁目3番1号

電話 098-994-3593・3597

ファクシミリ 098-995-2357

担当者 漁業室 下條 武

e-mail:shmojotk@pref.okinawa.jp

### 高水温！サンゴ危うし！

沖縄県水産試験場は、耐久性大型浮魚礁「ニライ」、当試験場調査船「図南丸」及び、西海区水産研究所との共同研究で（株）有村産業の定期船フェリー「飛龍21」にご協力いただき、流況や水温を観測しています。「ニライ」、「図南丸」及び、定期船フェリー「飛龍21」による水温観測の結果、沖縄本島近海域が高水温となっていることが分かりました。特に本島近海の「P-8（北緯25度58分、東経127度42.5分）」において、この傾向が顕著に観測されましたので報告します。

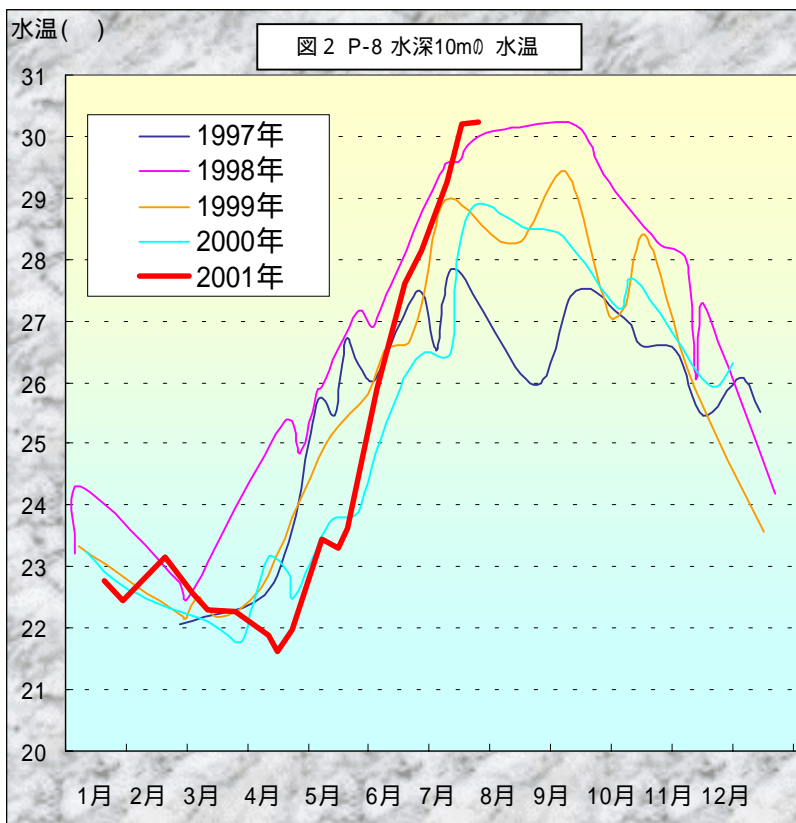
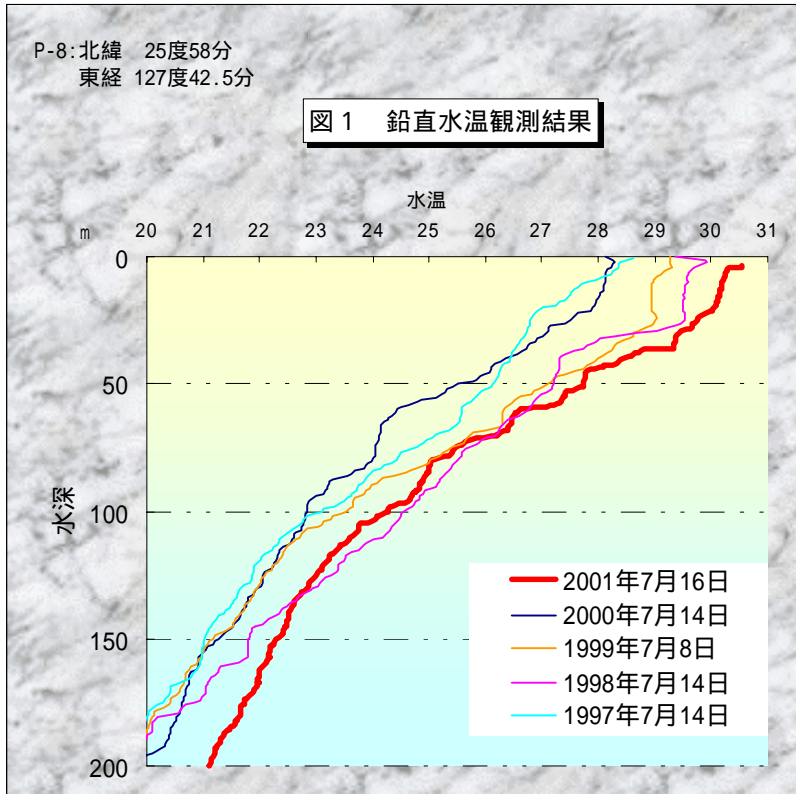
図1は、調査船「図南丸」で行ったP-8における海面から水深200mまでの鉛直水温観測結果です。

1997年から2001年までの各年7月の状況を比較すると、表面から水深50mまでの水温は例年より高くなっています。これは高水温によるサンゴの白化が大きな問題となった1998年の水準を上回るものです。

最近新聞等で報道されているとおり、本年7月沖縄本島南部で異常潮位が観測されていますが、その原因として暖水渦が考えられます。暖水渦とは暖かい水塊のことで、人工衛星の情報から、この暖水渦が沖縄本島南東海域から西に移動していることが分かります。

図2は、P-8における水深10mの水温観測結果を月日順に並べたものです。

今年の水温は4月及び5月は例年より低かったのですが、6月以降急激に水温が高くなり、現在も高水温が続いています。



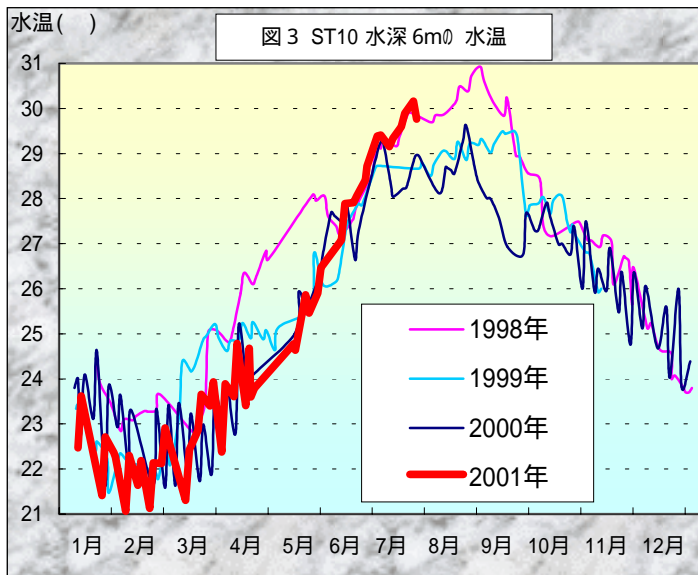


図3は、定期船フェリー「飛龍21」で行ったST10（宮古島）における水深6mの水温観測結果です。今年の1月から6月までは、例年と同じ水準もしくは例年より水温は低かったのですが、6月以降水温は例年を上回っており、1998年の水準と同等となっています。

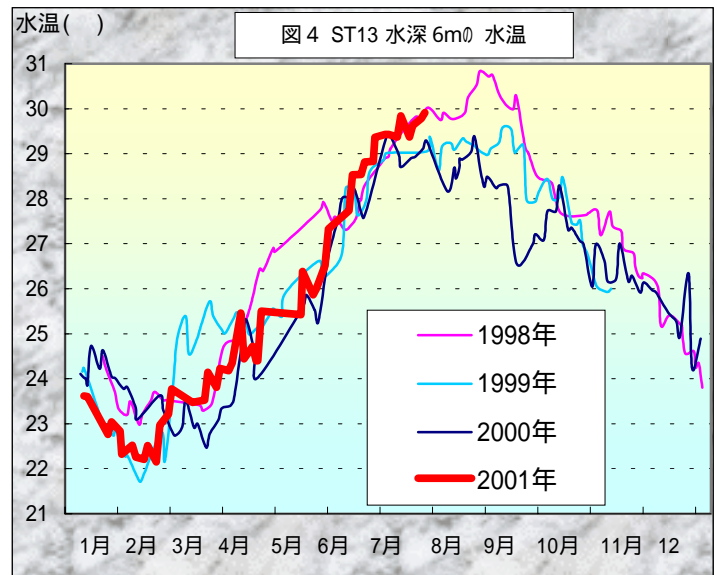


図4は、定期船フェリー「飛龍21」で行ったST13（石垣島）における水深6mの水温観測結果です。ST13においてもST10と同様、今年の1月から6月までは、例年と同じ水準もしくは例年より水温は低かったのですが、6月以降水温は例年を上回っており、1998年の水準と同等となっています。

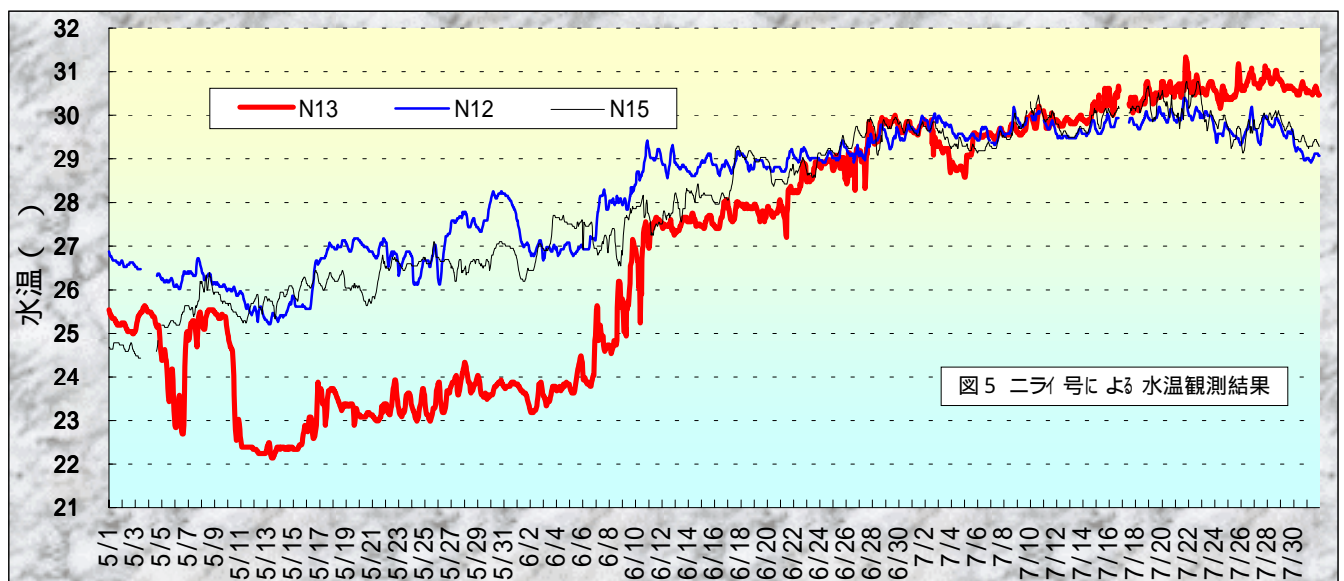


図5は、ニライ12号（石垣島北西）、13号（粟国島北）及び、15号（宮古島北西）における水深4mの水温観測結果です。宮古島と石垣島の水温は同じように推移していますが、沖縄本島西側の粟国島北では5月中旬から6月上旬まで比較的低い水温でした。しかし6月中旬以降、水温は徐々に上昇し、現在高い水準で推移しています。このように、沖縄本島南部（P-8）だけでなく、沖縄本島西部海域も高水温であることが分かりました。

以上のように、今年は全般的に高水温が観測されています。さらに、この水温の推移は、高水温によるサンゴの白化が大きな問題となった1998年の水準を上回るのは確実で、1998年同様サンゴの大量白化が予想されます。既に7月27日現在、各方面からサンゴの白化が観察されたとの報告があります。サンゴの白化は魚介類資源の維持と、持続的利用を具体的に担う空間を失うこととなります。また高水温は、魚類養殖においても、容存酸素量の低下、魚体へのストレス、魚病が発生しやすい条件となります。モズク養殖においては、高水温が長引くと天然採苗に影響がでることも考えられます。

水産業における高水温対策の立案・実施は困難ですが、各個人が現状を認識し、その根本的な原因の考察に勤めることが、将来的な改善策につながるものと考えます。

**魚類・藻類養殖に従事されている方は今後も水温にご注意下さい**